

なぜ村上春樹は父について語るとき、猫を語るのか

——『猫を棄てる』論、あるいは村上春樹の世界像——

杉山裕紀

はじめに

村上春樹の『猫を棄てる 父親について語るとき』（文藝春秋、二〇二〇年四月、以下『猫を棄てる』）は、もともと「特別寄稿」自らのルーツを初めて綴った 猫を棄てる——父親について語るときに僕の語ること」と題して『文藝春秋』二〇一九年六月号（五月十日発売）に寄稿されたものである。初出の副題にもあるように、この作品はほとんどプライベートを明かさない春樹が「自らのルーツを初めて綴った」エッセイ^{〔1〕}すなわち自分のアイデンティティ、遡っては父（村上千秋、一九一七—二〇〇八年）の過去について触れたとして、発表当初から大きな反響を呼んだ。

村上千秋は息子・春樹の誕生した一九四九年四月、現在の甲陽学院中学校・高等学校（兵庫県西宮市）で国語科教諭の職を得た。教師としてはユーモラスで、その授業では生徒たちの笑いが絶えなかったと言われる一方、息子の春樹とは折り合いが悪く、早稲田大学進学後の春樹に関しては「没交渉である」が常套句であったと言われる^{〔2〕}。その

ような父子関係であったからこそ、父について詳細に語った本作品は村上春樹研究において最も重視されるべき作品のひとつだと言える。

これまで本作品については、戦争責任への言及や記憶の継承に注目する書評、「大宇宙がもたらす偶然性」に注目する論^{〔3〕}などが提示されているが、先行研究における問題点として次の二点を指摘したい。

一点目は、いずれの論考も、事実が書かれたエッセイという前提のもと『猫を棄てる』を扱っている点である。後述するように、本作品には客観的事実のみで構成されたエッセイとは断言しがたい表現が含まれている。このことから、本稿では作中人物と実在人物、つまり「僕」と村上春樹、「父」と村上千秋とを一旦切り離して扱うこととする。

二点目は、そのタイトルにもある「猫」の意味についての研究が不十分な点である。本作品の構成上の特徴として、鴻巣友季子が「本編の幕を軽やかに開き、また閉じる狂言廻しの役割を、二匹の猫は果たしている」^{〔4〕}と指摘したように、作品の始めと終わりにかつて飼っていた猫のエピソードが示されるといふ点が挙げられる。しかし、本作品

に登場する二匹の猫は「狂言廻し」以上の役割を持つのではないか。なぜ村上春樹が自らのアイデンティティと父とを語る際、猫について語る必要があったのかという点には、看過できない問題が存すると考えられる。

そこで本稿では、『猫を棄てる』を「第一エピソード…父と棄てた猫」、「第二エピソード…僧侶としての父」、「第三エピソード…兵隊としての父」、「第四エピソード…木の上で消えた猫」の四部構成をとる作品と捉えたい。始めと終わりに猫のエピソードが配置されることで、全体として対称をなす構成となっている。そして、後に説明するように第一エピソードは第二エピソードを、第四エピソードは第三エピソードをそれぞれ補完し、それぞれの猫は父のエピソードにイメージの広がりを与える役割を持っていると考えられる。

本稿では、なぜ村上春樹が自らのルーツを語る際、猫に言及する必要があったのかを出発点に、『スプートニクの恋人』（講談社、一九九九年四月）及び「人喰い猫」（村上春樹全作品1979～1989）⁸（講談社、一九九一年七月）初出）、さらに「甲陽学院新聞」に寄稿された村上千秋の回想録を参照しながら、春樹が『猫を棄てる』において自己のルーツ及び父との関係をどのように捉えたのかを明らかにし、春樹の世界像のありようへと展開させたい。

一 『猫を棄てる』の世界像——猫が消えた木

まず、『猫を棄てる』の末尾に配置された第四エピソード（木の上で

消えた猫）の検討を通し、本作品に通底する世界像を明らかにしたい。第四エピソードは、「僕」が子供時代に経験した不思議な出来事のひとつである。

もうひとつ子供時代の、猫にまつわる思い出がある。これは前にどこかの小説の中に、エピソードとして書いた記憶があるのだ
が、もう一度書く。「中略」

ある夕方、僕が縁側に座っていると、僕の目の前でその猫はするすると松の木を上っていった（うちの庭にはとても立派な一本の松の木が生えていた）。まるで自分の勇敢さ、機敏さを僕に自慢するみたいに。子猫は驚くほど軽快に幹を上って、ずっと上の枝の中に姿を消した。僕はじっとその光景を眺めていた。しかしそのうちに、子猫は助けを求めるような情けない声で鳴き始めた。

（二〇九—一一〇頁）

「僕」は「父」に助けを求めたが、「父」にも打つ手はなく日が暮れてしまう。その後、飼っていた子猫は行方知れずとなる。この出来事が幼い「僕」に残した教訓は、「降りることは、上がることよりずっとむずかしい」、「より一般化するなら」「結果は起因をあつさりと呑み込み、無力化していく。それはある場合には猫を殺し、ある場合には人をも殺す」ということだった。

この不思議なエピソードが「自らのルーツ」を語る作品の末部に置かれたのはなぜなのだろうか。また、「僕」の述べる「結果は起因を

あつさりと呑み込み、無力化していく」という教訓が意味するところはどのようなものなのか。

この問題の解決の糸口となるのは、引用文中傍線部「どこかの小説の中に、エピソードとして書いた記憶がある」という箇所であろう。鴻巣が指摘するように、「どこかの小説」とは前掲『スプートニクの恋人』およびその原型とされる短編小説「人喰い猫」に他ならない。以下、両作品の該当箇所を引用する。

小学校の二年生くらいのとき、生まれて半年くらいのきれいな三毛猫を飼っていた。わたしが夕方に縁側で本を読んでいると、その猫が庭に生えていた大きな松の木の根もとを、すごく興奮して飛びまわっていた。「中略」そしてひとしきりそれを続けたあとで、松の木の幹を一気に駆け上がった。見上げると、遙か上の枝の隙間から顔が小さくのぞいていた。わたしは縁側から大きな声で猫の名前を呼んでみたの。でも聞こえないみたいだったわ。「中略」猫はそのまま消えてしまったの。まるで煙みたいに。(『スプートニクの恋人』「8」)

そのころ僕はけっこう大きな庭のある社宅に住んでいた。庭には古い松が生えていた。見上げてても枝の上の方がよく見えないくらい高い木だった。あるとき僕が縁側に座って本を読んでいると、うちで飼っていた三毛猫が庭でひとりで遊んでいた。「中略」そしてひとしきり回ったあとで、一気に松の幹をいちばん上まで駆け上

がってしまった。「中略」僕はなんだかすごく気になったんで、ずっと猫が下りてくるのを待っていたんだ。でも猫は下りてこなかった。やがてあたりは真っ暗になった。そして猫はそれを最後に姿を消してしまったんだ(『人喰い猫』『村上春樹全作品1979』1989) 8 二六六―二六七頁)

引用したエピソードを語る人物は、『スプートニクの恋人』ではすみれ、「人喰い猫」では「僕」である。語り手が子供のころ、縁側に座っていると、飼った猫が庭の大きな松の木に駆け上がり降りられなくなつたまま姿を消す、という展開が三作品に共通している。

先行研究においては未だ三作品の比較検討が不十分なことから、その比較を通し、『猫を棄てる』における第四エピソードの役割を浮き彫りにしたい。

―― どこにも行けないすみれ、イズミ、猫

「人喰い猫」は『スプートニクの恋人』の原型であると先に述べたが、この二作品に共通するのは猫が消えるエピソードと、女性登場人物がその猫のように忽然と姿を消す展開である。消える女性は『スプートニクの恋人』ではすみれ、「人喰い猫」ではイズミである。

両作品は主題においても共通点を持つ。『スプートニクの恋人』における「ぼく」の独白「すべてのものごととはそこで行きどまりになっていて、誰もどこにも行けない。選ぶべき選択肢がない。」(「10」)は、同作に通底する主題を比喩的に表すものであるとともに、原型作品「人

喰い猫」の主題をも表していると言える。つまり両作品に共通して描かれるのは「どこにも行けない」という閉塞感である。

筆者は以前、『スプートニクの恋人』で繰り返される「どこにも行けない」という言葉を、「今・ここを生きる自己」という閉塞からの「出口」を求める意識、「今・ここにいる自己を形成してきた人生の軌跡に対する否定的な感情」すなわち「別様の自己への羨望」を呼び起こす心情であるとし、その上で「あちら側」とは、あり得たかもしれない別様の現実である」と指摘した⁽⁸⁾。

『スプートニクの恋人』のすみれは「この世界に人生の選択肢がどれほど数多く存在しようとも、小説家になる以外に自分の進むべき道はない」(1)と考えている。しかし自分の書くこうとしている「いろいろなイメージや、情景や、切れ切れの言葉や、人々の姿」は、「結晶することなく、石ころのまままで終わってしまう」。このような自身の状態をすみれは「わたしはどこにも行けない」(1)ということばを用い、閉塞感として表している。その上すみれは、恋心を寄せる女性・ミュウへの求愛も失敗し、ミュウと滞在していたギリシャで突如姿を消す。理想の自己と現実の自己との不一致、つまり今・ここを生きる自己への違和感を抱えていたすみれは、「こちら側」の世界と自己とのつながりを見失い、「あちら側」すなわち「あり得たかもしれない別様の現実」へと引き込まれたのである。

同様に「人喰い猫」でも、登場人物は今・ここを生きる自己への違和感を抱えている。それぞれに家庭を持つ「僕」とイズミは、互いに恋に落ちたことでそれぞれの家庭を崩壊させ、日本での居場所を失い

ギリシャに逃避するが、あるとき忽然とイズミが姿を消してしまう。

不倫前の「僕」は「まずまず快適な住まい」(二五六頁)で暮らし、「職場がまずまず気に入っていた」(二五七頁)、換言すれば自己を世界と調和させて生きてきた人物である。それゆえ、ギリシャに向かう飛行機の中やギリシャに到着したあとは、「僕は自分がこんな場所に属しているという事実がよく飲み込めなかった」と述べるなど、今・ここにいる自己像を受け入れられずにいる。

もしそのスツケースをなくしてしまったら、僕と僕の人生を結びつけるものなんてイズミの他にはもう何もないのだ。そう思うと、僕は僕という人間の実体を見失ってしまったような気がした。それは生まれて初めて経験する不思議な感覚だった。自分という人間が自分に思えないのだ。「中略」そのあいだずっとイズミは僕の手を握ってくれていた。ときどき肩を抱いてくれた。彼女は何も言わなかった。でも彼女には僕の気持ちがかかるようだった。(二六二―二六三頁)

「僕」が感じているのはまさしく、自分はこんなはずではないという、今・ここを生きる自己への違和感であり、その結果生じたアイデンティティの崩壊、乖離の感覚であろう。下線部で示したとおり、この感覚はイズミも同様に覚えていたものと考えられる。ギリシャに発つ前、高校時代からの付き合いであった夫に「僕」との不倫が露呈したイズミは、象徴的に彼女自身の存在を切り裂かれる。

彼女の夫もやはり（しかし僕の場合とは違って、さんざんイズミを殴り、彼女の服をオーバーコートから下着にいたるまで残らずに銕でずたずたに切り裂いたあとで）家を出ていつてしまったのだ。何処に行ったのかもわからなかった。私の方はもう駄目だわ、と彼女は言った。もう全然駄目、取り返しがつかない。（二六〇頁）

視点人物ではないイズミの内面が直接描かれることのないこの作品の中で、衣服が「残らず銕でずたずたに切り裂」かれることは、イズミの存在を象徴的に分裂、乖離させ、居場所を失わせることを意味している。これは後にギリシャで消えてしまうことを予感させる。イズミの「取り返しがつかない」感じとは、今・ここへと至る選択肢を選び続けてきた自己への強い後悔や閉塞感である。

さらに木の上で消えた猫の話を「僕」から聞かされた際には「もし日本に帰りたくなったらあなたはひとりで勝手に帰っていい」（二六八頁）と述べているが、これは「僕」に対する信頼が揺らいでいるからこそ出た言葉であろう。全てを失い、唯一の世界とのつながり、精神的な居場所である「僕」との心のつながりを信頼できなくなっているイズミは、「僕」以上に閉塞感が強かったと考えられる。

イズミは「僕」以上に今・ここにいる自己への違和感を強く抱き、現状への閉塞感が極限に達した結果、別様の現実（『スプートニクの恋人』で言う「あちら側」）へ行ってしまう、忽然と消えたのだと解釈できよう。

以上に挙げた人物が共通して抱えるのが、「今・ここを生きる自己へ

の違和感」であることに間違いないだろう。あり得た他の選択肢ではなく、今・ここへと至る選択肢を選び続けてきた結果、「どこにも行けない」状況へと追い込まれる。まるで『スプートニクの恋人』のミウが頂点に到達した観覧車の中に閉じ込められたように、登場人物たちは自分と世界とのつながりを遮断され、孤立してしまう。そしてこれまでの選択を行ってきた今・ここを生きる自己を「何か（なにか）が欠けている」（「1」、「12」）ものとして否定せざるを得なくなり、「出口」＝別様の自己に惹きつけられる。

すみれやイズミの置かれた状況は木の上から降りられなくなった猫と同じ状況であると言える。猫は選ぶ枝さえ間違えなければ、木から降りることも可能だったはずである。しかしながら、最も高い枝を選択した結果、降りる手段を失い、もと来た道に戻ることができなくなった。選択を重ねた結果、猫が行き止まりの枝という閉塞へと追い込まれ、姿を消したように、すみれやイズミも、それぞれ選択を重ねた結果、「どこにも行けない」閉塞状況に追い込まれ、忽然と姿を消してしまう。両作品に登場する木の上で消えた猫は、まさしく人生の選択を誤り、引き返すことができなくなって「あちら側」へ姿を消すみれとイズミ（そして半分が「あちら側」へ失われたミュウ）の暗喩に他ならない。

一―二 無数に枝分かれする世界

ここで注意したいのは、『スプートニクの恋人』および「人喰い猫」の中心にあるモチーフが、登場人物の選択ごとに、あたかも猫が消え

た木のように枝分かれし、分岐する世界像であるという点である。『スプートニクの恋人』では自身が選んだ枝＝今・この現実のことを「こちら側」、選ばなかった別の枝＝別様の現実（可能世界）のことを「あちら側」と呼称しており、これが作中の最重要概念となっていた。猫すみれ、イズミは枝を選び続けた結果、最終的に「どこにも行けない」状況に陥ったのである。特に顕著なのはすみれであろう。先に引用したように、彼女は「この世界に人生の選択肢がどれほど数多く存在しようとも」小説家を目指す人生を歩んできた。すみれには失われた別様の現実が多分にあったのだが、小説家にこだわった結果、「どこにも行けない」枝に追いやられたのである。

選択の繰り返しに「どこにも行けない」閉塞状況に陥り、理想の自己と現実の自己との乖離あるいは世界からの疎外を感じ、そのような選択を行ってきた自己を否定せざるを得ない状況になったら、どうするか。自殺するのだければ、決死の覚悟で今・この枝から別の枝へ飛び移る（跳躍する）より他ない。すなわち「あちら側」＝別様の現実への移行である。姿を消したすみれもイズミも、「こちら側」での居場所を失った結果、別様の現実に移ったのであろう。

ある選択肢を選び取る（あるいは選んでしまふ）ことによって、無数に分岐する世界のいずれかひとつの世界に進むということと、すみれやイズミが「あちら側」の世界へと消える＝別様の現実には跳躍するということとは全く別の現象である。前者は時間的にひと続きの世界に進むことであり、喻えるならば木の幹から伸びた枝へ、さらにそこから伸びた枝へと跳躍を伴わずに上っていく行為である。一方後者は、

時間的に不連続の別世界へと移行することである。喻えるならば、行き止まりになった枝から、そこと直接には接続しない別の枝へと跳躍する行為である。前者は我々の生きる現実世界でも起こりうることであるのに対し、後者は非現実的な現象である。

ところで、『スプートニクの恋人』や「人喰い猫」における世界の分岐すべてが、登場人物の計画的な選択で生じたわけではないことには注意が必要だろう。芸術家（小説家、ピアニスト）を目指す情熱や激しい恋愛感情などにより、衝動的に登場人物がある選択肢を選ぶ点に両作品の特徴がある。例えば「人喰い猫」の「僕」は、「もし何ごとでもなかったなら」それまでの平穏な日常を継続していたはずだったが、イズミとの「奇跡とか僥倖とかに近い」（二五八頁）出会いによって、あり得た平穏な未来を放棄することになった。ある選択肢が持つ抗いがたい誘因力のせいで他の選択肢が目に入らず、決して選ぶことが必然ではないはずの枝を選んでしまふ、というのが『スプートニクの恋人』と「人喰い猫」とに共通する行動パターンなのである。言い換えれば、一本の幹のような絶対的・必然的な世界像を排し、無数の枝に分かれる相対的・偶然的な世界像が根底にある点で両作品は共通する。

以上に見たように、『スプートニクの恋人』「人喰い猫」で猫の上った木とは、分岐する世界の比喩であった。生きていく中で私たちは、その都度行う選択や生じる偶然次第で全く異なった世界に行くことになる。言われてみれば当たり前なのだが、「あちら側」も「こちら側」もそれぞれ無数に存在する可能世界のひとつに過ぎないわけである。『スプートニクの恋人』の世界像は一見「こちら／あちら」という二項対

立的世界像に見えるが、その実「あちら側」は複数性を持ち、「こちら／あちら」はいつでも転倒しうる相対的・偶然的なものであった。

望むと望まざるとに関わらず、どこかで別の枝に上っていれば、この私は今・ここには存在していないかもしれない。——この意識はまさに『猫を棄てる』で「僕」が展開している自己存在のあり方そのものである。

その証拠に、木の枝のごとく分岐していく現実世界という意識は、第四エピソード（木の上で消えた猫）に前後して表れている。

もし父が兵役解除されずフィリピン、あるいはビルマの戦線に送られていたら……もし音楽教師をしていた母の婚約者がどこかで戦死を遂げなかったら……と考えていくととても不思議な気持ちになってくる。もしそうなっていれば、僕という人間はこの地上には存在しなかったわけなのだから。（一〇七—一〇八頁）

第四エピソードは、上記引用箇所が続く形で展開される（「父」の「兵役解除」については後述）。

ここで「僕」は、「もし」と畳みかけることで今・ここにある現実とは別様の現実を想起していると言える。『スプートニクの恋人』で言うところの「あちら側」の扉を開く準備を整え、次なる猫のエピソードを引き出し、その主題を明確にするための導入箇所として機能しているのではないだろうか。

この点を明確にするのが、第四エピソードのあとに続く以下の表現

である。

それが僕の子供時代の、猫にまつわるもうひとつの印象的な思い出だ。そしてそれはまだ幼い僕にひとつの生々しい教訓を残してくれた。「降りることは、上がることよりずっとむずかしい」ということだ。より一般化するなら、こういうことになる——結果は起因をあつさりと呑み込み、無力化していく。それはある場合には猫を殺し、ある場合には人をも殺す。

いずれにせよ、僕がこの個人的な文章においていちばん語りたかったのは、ただひとつのことではない。ただひとつの当たり前前の事実だ。

それは、この僕はひとりの平凡な人間の、ひとりの平凡な息子に過ぎないという事実だ。それはごく当たり前の事実だ。しかし腰を据えてその事実を掘り下げていけばいくほど、実はそれがひとつのたまたまの事実でしかなかったことがだんだん明確になってくる。我々は結局のところ、偶然がたまたま生んだひとつの事実を、唯一無二の事実とみなして生きているだけのことなのではあるまいか。（二二—二四頁）

猫が消えてしまった木とは、その都度分岐していく現実世界の時間の暗喩であろう。ここで、子猫が木の下から上に向けて（いずれかの枝を目掛けて）上るという行動は、時間軸として過去から未来へ向かう、不可逆のものである。我々は人生においてある分岐点に立たされ

た際、複数ある枝のうちのいずれかひとつを選び取り、前へ進むことしかできない。時間を巻き戻し、現実を再度選び直すことは不可能である。つまり木を上から下へ逆行することはできない。こうした現実世界の分岐と選択につきまとう不可逆性を表したのが、引用文中の「降りることは、上がることよりずっとむずかしい」の意味するところであろう。続く「結果は起因をあつさり」と呑み込み、無力化していく」についても、この現実世界においては、起こってしまったこと＝結果がある以上、分岐する前の地点＝起因に遡ってやり直すことは不可能であることを示していると考えられる。「僕」が誕生したことは、「偶然がたまたま生んだひとつの事実」であり、必然などではない。我々は日常的には目の前にある現実を「唯一無二の事実とみなして生きている」ものだが、実際には無数の世界が「あちら側」に広がっている。単行本所収の際に加筆されたあとがき「小さな歴史のかげら」にも、ほぼ同義の一節が含まれる。

父の運命がほんの僅かでも違う経路を辿っていたなら、僕という人間はそもそも存在していなかったはずだ。歴史というのはそういうものなのだ——無数の仮説の中からもたらされた、たったひとつの冷厳な現実。(一一九—一二〇頁)

「僕」は自己が存在する世界が必然的なものではなく、「無数の仮説」、つまり無数のあり得た現実の中から偶然選ばれた「たったひとつの」現実であると言う。言い換えれば、「僕」は自己の存在の根拠、「自ら

のルーツ」を「偶然性」に見出しているのである。

これらの表現を照らし合わせると、『猫を棄てる』の根底にある世界像は、『スプートニクの恋人』や「人喰い猫」同様、枝分かれによって生じる相対的・偶然的な世界⁹であると言えよう。

ただし、『スプートニクの恋人』や「人喰い猫」以上に、『猫を棄てる』では分岐が「偶然がたまたま生んだ」ものである点が明確に強調されている。

注目すべきは、こうした世界像が『猫を棄てる』と同時期に発表された短編小説「一人称単数」(「一人称単数」所収、文藝春秋、二〇二〇年七月)とも共通する点である。田中実¹⁰は次のように指摘している。

『一人称単数』の第三段落では「そして私は今ここにいる。ここにこうして、一人称単数の私として実在する。もしひとつでも違う方向を選んでいたら、この私はたぶんここにいなかったはずだ。」とありますが、これは『猫を棄てる』では、「我々は結局のところ、偶然がたまたま生んだひとつの事実を、唯一無二の事実とみなして生きているだけのことなのではあるまいか。」と言っているのとはほぼ同義です。

この田中の議論を借りれば、「こちら側」にはない複数の「あちら側」の世界には、あの私たちが存在する。それに対し、今・ここを生きる「私」を(一人称単数の私)と呼ぶことができる。『猫を棄てる』とは、「僕」が(一人称単数の私)の輪郭を明確にしようとした作品で

あると言えるだろう。

以上のように、『猫を棄てる』の根底にあるのは、『スプートニクの恋人』『人喰い猫』同様、[△]枝分かれによって生じる相対的・偶然的な世界[△]であり、かつ自らのルーツや自己存在の根拠を[△]偶然性[△]に見出そうとする「僕」の意識である。

以下、『猫を棄てる』においてこの他にも表れた[△]偶然性[△]の強調と考えられる表現を検討していきたい。

二 偶然性の強調1 猫の帰還

『猫を棄てる』の第一エピソード（父と棄てた猫）は、「僕」が小学校低学年の頃、飼っていた猫を「父」とともに香櫨園浜に棄てに行くというものである。

我々が夙川（兵庫県西宮市）の家に住んでいる頃、海辺に一匹の猫を棄てに行ったことがある。「中略」夙川沿いに香櫨園の浜まで行って、猫を入れた箱を防風林に置いて、あとも見ずにさっさとうちに帰ってきた。うちと浜とのあいだにはたぶん二キロくらいの距離はあったと思う。（十二―十五頁）

「僕」は「父」とともに自転車に乗り、飼っていた猫を香櫨園浜へ棄てに行った。しかし帰宅した彼らを待ち受けていたのは意外な展開だった。「さっさき棄ててきたはずの猫が」「先回りして、とつくに家に帰っ

ていた」（十六頁）のである。この出来事に、「なにしろ僕らは自転車ですぐ帰宅したのだから」「とても理解できなかった」と「僕」は感じた。

ここで印象的に描かれるのは、「父」の表情である。

そのときの父の呆然とした顔をまだよく覚えている。でもその呆然とした顔は、やがて感心した表情に変わり、そして最後にはいくらかほっとしたような顔になった。（十六頁）

「父」の「ほっとしたような顔」という描写からは、猫の帰還という人智を越えた出来事を「僕」と共有し、共感し合う親子の姿が読み取れよう。自分と同じ気持ちを持共有する「父」の表情は、印象深く「僕」の記憶に刻まれたのだ。

だが、その後のエピソードを読み進めると、「ほっとしたような顔」には父子の絆を示す以上の役割があることが判明する。「父」は幼少の頃、「養子になる含みを持って」「奈良のどこかのお寺に小僧として出された」という。その話（第二エピソード）は以下のように続く。

しかし奈良のどこかのお寺にやられてから、しばらくして父は京都に戻されてきた。寒さのために健康を害したというのがその表向きの理由だが、新しい環境にうまく馴染めなかったということも大きかったようだ。実家に戻されてきた父は、それからあとどこにやられることもなく、安養寺「引用者注」「父」の生家」

で両親の子供として普通に育てられた。しかしその体験は父の少年時代の心の傷として、ある程度深く残っていたように僕には感じられる。「中略」浜に棄ててきたはずの猫が僕らより先に帰宅して、いたのを目にして、父の呆然とした顔がやがて感心した顔になり、そしてほっとしたような顔になったときの様子を、ふと思いだしてしまふ。(三十七—三十八頁)

先の引用文中の傍線部と上記引用箇所との傍線部とは、平野芳信が指摘した通り「千秋氏の幼少期における秘密と呼応関係」¹⁰にあり、「かつて父と祖父・村上弁識との間で起きた出来事の構造的反復」^(佐藤)である。「父」はよその寺に養子として出され、親に棄てられ、新たな環境に適応できず生家に戻ってきた幼少期の自分と、浜に棄てられたものの戻ってきた猫とを重ね合わせ、安堵の表情を浮かべたのである。つまり、棄てられた猫をかつて棄てられた自身の分身と見なしているのである。「父」の内面を直接窺い知ることはできないが、少なくとも「僕」は読み手に「棄てられた猫¹¹ 棄てられた父¹²」として読ませようとしている。

ここで一点指摘しておかなければならないのは、人よりも早く猫が自宅に帰還したという出来事について、その人智や理屈、因果関係を超えた不思議な側面を作者・春樹が事実より誇張している可能性である。

猫を棄てた時期は「昭和30年代の初めだったろう」とされている。その時期の村上家の住所を、「父」＝村上千秋の勤務校・甲陽学院の職員

住所録で調査したところ、『猫を棄てる』における以下の記述との矛盾点が明らかになった。

夙川沿いに香櫨園の浜まで行つて、猫を入れた箱を防風林に置いて、あとも見ずにさっさとうちに帰ってきた。うちと浜とのあいだにはたぶん二キロくらいの距離はあったと思う。(十四—十五頁)

筆者の調査によると、当時村上家が入居していた同校職員住宅から香櫨園浜までは一キロ圏内であった。¹³さらに「夙川沿いに」という表現は、自宅から香櫨園浜まで寄り道をせずに向かったことを示している。いくら子供時代の感覚とはいえ、まったく南下して香櫨園浜まで「二キロ」はいささか大げさである(もし実際に当時の住所から二キロとなると甲子園浜や芦屋浜まで猫を棄てに行ったことになる)。これには作者・春樹の記憶違いという可能性もあるが、作者が『辺境・近境』(新潮社、一九九八年四月)で阪神・淡路大震災後に香櫨園浜を再訪し作品化したことを踏まえると、この距離表現には違和感が残る。

したがって、この引用箇所は完全な事実に基づいた記述ではなく、人よりも早く猫が帰還したという出来事のもっと不思議さをより一層強調するための仕掛けと考えられる。これはその後明かされる「父」の従軍体験における生と死をめぐる不思議さを予感させる伏線の役割を持つものでもあろう。棄てられた猫は不思議にも自力で遠い道のりを帰還し、死を免れた。養子に出された幼少期の「父」は生家に戻り、また大学

時代の「父」は戦死することなく兵役を終えた。このように、第一エピソードは作品全体に通底する不思議、偶然によるその後の生の変容を表したひとつの逸話と見なせるのではないだろうか。

ところで、第一エピソードでは棄てた猫が「父」の分身として表現されていた。とすれば、同様に木の上で消えた猫もまた、「父」の分身だと考えることができるのではないだろうか。ただしそれは、命びろいしなかったかもしれない、可能世界の「父」である。以下、第三エピソード（兵隊としての父）を検討したい。

三 偶然性の強調2 「父」の「命びろい」

三——父の筆による「命びろいの召集解除」

作者が『猫を棄てる』の中で最も多く分量を割いたのが「父」の従軍体験である。全体の構成の中では、棄てた猫、僧侶としての父に次いで第三エピソードと呼べるが、このエピソードもまた「偶然性」の強調が見られる箇所である。

「父」は「徴兵猶予を受ける権利を有していたのだが、正式に事務手続きすることを忘れていた」（四十三頁）ために、「1938年8月、二十歳のとき、学業の途中で徴兵されることになった」（四十四頁）。これまで「僕」は、「父」の従軍記録から意図的に目をそらし続けてきたという。

父が第二十連隊に所属していたと思ひ込んでいたせいで、僕は父

の軍歴について詳しく調べるまでに、というか調べようと決心するまでに、けっこう長い時間がかかった。父親の死後五年ばかり、そうしなくてはと思いながら、なかなか調査に着手することができなかった。

どうしてか？

それは歩兵第二十連隊が、南京陥落のときに一番乗りをしたことと名を上げた部隊だったからだ。「中略」ひよっとしたら父親がこの部隊の一員として、南京攻略戦に参加したのではないかという疑念を、僕は長いあいだ持つており、そのせいもあって彼の従軍記録を具体的に調べようという気持ちにはなかなかならなかったのだ。（四十六―四十七頁）

「父」千秋の「死後五年ばかり」すなわち二〇一三年頃まで、「僕」は「父」の軍歴の詳細を知らなかったことが窺える。

『猫を棄てる』によると、「父」は一九三八年八月（輜重兵第十六連隊）、一九四一年九月末（歩兵第二十連隊、のち輜重兵第五十三連隊）、一九四五年六月（中部一四三部隊）の合計三回にわたり軍事召集を受けている。このうち第一回の召集と第二回の召集の所属部隊を混同して記憶していたため、「僕」は「従軍記録を具体的に調べようという気持ちにはなかなかならなかった」のであるが、本作品において最も重要なのが第二回の召集であることに間違いはないだろう。

ところが意外な展開というべきか、召集を受けてから僅か二ヶ

月後、11月30日に父は唐突に召集解除になっている。つまり兵役を外れ、民間に戻ってよろしいということだ。「中略」僕が父から聞いた話では、彼は一人の上官のおかげで命を助けられたということだった。当時上等兵であった父はある上官に呼ばれ、「君は京都帝国大学で学ぶ身であり、兵隊であるよりは、学問に励んだ方がお国のためにもなるだろう」と言われ、軍務から外されたということだ。(七十九—八十頁)

二度目の召集を受けた「父」は上官の計らいで召集解除となり、命びろいする。この出来事を「僕」は子供の頃に聞かされた。しかし「僕」の調査では、「父」が京都帝国大学に入学したのは一九四四年十月のことであると言う。そして「僕」は上官の計らいによる命びろいについて、「となると「君は京都帝国大学で学ぶ身であり」という話は通らなくなってくる。たぶん僕の記憶がどこかで混濁しているのだろう」(八十一頁)と結論づける。

本当に「僕」春樹の記憶は「混濁」しているのだろうか。

ここで「僕」、少なくとも春樹の『記憶の混濁』の有無を検証する資料として、実在の「父」村上千秋による回想録「命びろいの召集解除」を提示したい「図1」。この回想録は、一九六四年六月、甲陽学院高等学校生徒会が発行した「甲陽学院新聞」第一〇二号の「私の思い出」コーナーに寄稿されたものである。

「命びろいの召集解除」(「甲陽学院新聞」第一〇二号より)

思い出すのもいやであるとともに、また一面平凡な私の人生に強烈な印象を残しているのは軍隊生活である。私は終戦まで三回召集されている。しかも普通の人のように学校を終えてから徴兵検査を受けて入隊したのではなく、学生の恩典であった徴兵猶予願いを提出することを忘れていたために、学業なかばにして兵隊にとられたのである。

第一回は昭和十四年八月、暑いさ中に京都輜重兵第十六連隊に入隊した。二カ月ほど申しわけに訓練され、中支派遣軍柄沢部隊に補充兵として送られた。この十六連隊にはその後私の兄も次の弟も入隊している。彼等は二人とも幹部候補生の試験を受けたので、のち兄は大尉に弟は中尉にまじった。もし顔をあわせることになれば、兄はともかく弟でも上官として敬礼せねばならないので、どちらもてれくさいだろうと思っていたが、



図1 甲陽学院資料室蔵

弟は飛行将校としてヒリッピンへ行ったのでそういうこともなかった。

私は輜重兵特務二等兵という最低の兵士だった。しかし戦地の一年あまりはたのしかった。兵隊の中ではいくらか学歴があったので、主として事務要員として陣中日誌を書いたり戦闘詳報を書く仕事をやった。二等兵としてはあまりなぐられもせず、別格にあつかってもらったようだ。古兵たちも、戦死したら私に報告書の文案を作ってもらわなければならないと思ったのかもしれない。

このごろはよく俳句を作った。最初大別山を越えるとき「大別の雪解嵐に馬勇む」という句を作ったのがホトギスに入選してから、折りにふれ句を作って内地に送った。「銃火ふと途絶ゆときあり草いきれ」という句は、聖戦名句集という本に採られた。「今日また野菊の丘に軍馬焼く」は、鼻疽という伝染病が出たときの句であるが、前書をつけなかったため、ある俳誌で「あわただし戦地で馬が死んだとて火葬するわけがない」と非難されたそうだ。

地の底に虫が鳴くなり麦の秋

なんばんの葉にからからと冬きたる

あふれ出し涙が耳へ雁渡る

一握の砂のごとくに鳥渡る

鳥渡るああのさきに故国がある

雨やまず流離の想い濃く暗く

など、いくつかの句がなつかしく思い出される。

第二回の召集は、福知山歩兵第二十連隊であった。この部隊はヒリッピンに渡って苦戦し、連隊長以下軍旗を焼きほとんど戦死した不運の部隊であった。オリンピックで入賞した棒高とびの大江少尉らも戦死した。ところが私は部隊がいざ出動するという直前に召集を解除された。その理由はいまだにわからない。人事掛の准尉は、私を呼んで「上等兵として野戦に行くより、京都帝国大学に帰る方がお前もよからう」と言った。軍隊とはそんな面白いものではない。しかし私はその翌日の夜、福知山から放たれた。その理由がわからない。いまにして思えばこれが私の生死のわかれ目であった。そのときの戦友に終戦後だけ一人として会ったことはない。

第三回の召集は終戦の年、こんどは自動車部隊であった。面白半分に自動車の運転免許証をとったばかりにとんでもないことになったのである。

故障一つなおせない自動車兵の悲喜劇と、敗戦後大学の文学部学生ならだれでも英語ができるだろうという部隊長の思いちがいから、進駐軍に武器を引きわたしたりする連絡係を命ぜられて、私の二倍もある米兵を相手に、あほらしいやらなさけないやら、おかしいやら言うに言えない苦勞をした。

終戦のときは輜重輪卒がいつのほどやら陸軍伍長となり勲章ももらっていた。しかし大学にもどって行く私はすでに二十七歳になっていた。

(一九六四年六月二十九日付、傍線は引用者による)

この記事は少なくとも『猫を棄てる』執筆前の春樹の目には触れていなかった可能性が高いと考えられる。もしこの記事に目を通していたならば、「父」が南京攻略戦に参加したという誤解は持ち得なかったと考えられるからである。あるいは春樹は『猫を棄てる』執筆に際し入手したのかもしれないが、少なくとも同作中人物としての「僕」は読んでいないものとして「父」を語っている。引用文中の傍線部に注目したい。この箇所は、「僕」が「子供の頃に僕が聞かされた」「興味深いエピソード」とおおむね一致する。「僕」春樹は、「父」千秋から、上官の言葉によって召集解除され命びろいしたという思い出を、子供の頃に聞かされていたのだとひとまず言える。

実際、筆者が千秋の京都帝国大学在籍期間について京都大学に問い合わせたところ、昭和十九年十月一日入学―昭和二十二年九月二十三日卒業（但し、「昭和二十年六月十二日 中部第一四三部隊入営」、「昭和二十年十月三十日復員」との記載有り）との回答が得られた。これは『猫を棄てる』に記された「僕」の調査結果と一致し、「父」が京都帝国大学の現役学生であったことを理由に召集解除されたという話は筋が通らず、「僕」が自身の

表1 村上千秋年譜

西暦	月日	「僕」が記述する「父」	千秋自身の回想	千秋に関する客観的事実
一九三六	八月一日	西山専門学校入学		
一九三八	一月三日	第一回召集（第十六師団 輜重兵第十六連隊 特務二等兵）		
	一月六日	宇品港出港		
	一月二五日	上海上陸		
	三月一七日	河口鎮付近で追撃戦		
	四月三〇日	安陸攻略戦		
	五月二四日	襄東会戦		
一九三九	八月	中国兵の処刑？		
	八月二〇日	復員		
	一〇月ころ	のち、西山専門学校復学	中支派遣軍柄沢部隊補充兵	
	三月	西山専門学校卒業		
	九月末	第二回召集	（年月不記載）第二回召集	
一九四一	一〇月三日	歩兵第二十連隊入隊 のち、輜重兵第五十三連隊に編入	（年月不記載）福知山歩兵第二十連隊入隊	
	十一月三〇日	召集解除	（年月不記載）召集解除（すでに京都帝国大学の学生？）	
一九四二		「どこで何をしていたのか、僕にはわからない」		
一九四三				
一九四四	一〇月	京都帝国大学入学（文学部文学科）		一日、京都帝国大学入学（文学部文学科国語学国文学専攻）
	六月二二日	第三回召集 中部一四三部隊入営（自動車部隊）	（日付不明）第三回召集 自動車部隊	中部第一四三部隊入営
一九四五	一〇月	二八日、復員	（日付不明）「大学にもどって行く私はすでに二十七歳」	三〇日、復員
一九四七	九月	京都帝国大学卒業 大学院進学		二三日、京都帝国大学卒業
一九四九	四月			甲陽学院就職

記憶を疑うのも無理はない。

ここで、それぞれが述べる「父」千秋の徴兵にまつわる年譜を「表1」に示す。

京都帝国大学在籍時期のほか、第一回の召集についても一年のズレがあるなど、千秋の回想録には矛盾が見受けられ、千秋の方にこそ、記憶の混濁⁶があったと思われる。

特になぜ召集解除の時期の齟齬が生じたのかについて、ここでいくつか仮説を挙げたい。

まず、千秋が第二回と第三回の召集の記憶を混同してしまっていることが考えられる。上官の発言については、実際に彼が京都帝国大学に在籍していた第三回の召集の際の何かしらの記憶との混乱があるのかもしれない。

次に、上官の言葉の細部を千秋が誤って記憶したことが考えられる。京都帝国大学生ではない千秋に、上官が「君は京都帝国大学で学ぶ身であり」というはずはない。第一回の召集の際、「兵隊の中ではないからか学歴があったので」、「中略」二等兵としてはあまりなぐられもせず、別格にあつたのもあったようだ。」とあることから、軍隊の中では千秋が学のある人物であることは知れ渡っていたと思われる。ひょっとすれば、千秋がゆくゆくは京都帝国大学へ入学したいと希望していることを上官が知っていた、といったようなこともあったのではないだろうか。そして（あくまで仮説ではあるが）「上等兵として野戦に行くより、日本に帰り、京都帝国大学に入る方がお前もよからう」などと上官が言ったのを、「上等兵として野戦に行くより、京都帝国大学に帰

る方がお前もよからう」と千秋が誤って記憶し、さらにそれを聞いた春樹が「君は京都帝国大学で学^ぶ身であり、兵隊であるよりは、学問に励んだ方がお国のためにもなるだろう」とさらに誤って記憶し、在籍記録との決定的な矛盾が生じた——というように、上官の言葉の記憶がそれぞれの人物の中で少しずつ変容した可能性もあるのではないか。

「命びろいの召集解除」は全体としてあまり戦場の血生臭さや過酷さには触れない記述となっており、『猫を棄てる』と比較すると読後の印象は大いに異なる。冒頭には、「思い出すのもいやであるとともに、また一面平凡な私の人生に強烈な印象を残しているのは軍隊生活である」とあることから、千秋は真に過酷な記憶や心の傷となった記憶を故意に抑圧しており、それゆえに記憶の混乱や変容が生じたのではないかと推測することもできる。

しかしいずれにせよ、上官の言葉によって召集解除されたという逸話を、千秋が息子・春樹に語り、それを春樹が記憶していた、ただしその細部に「記憶の混濁⁶」があったことに間違いはないようである。

ここで取り上げるべき問題は、経歴の矛盾ではなく、「父」の「命びろい」の理由＝必然性を探ろうとせず、「偶然⁷」として捉えようとしている「僕」の態度であろう。

三―二 「命びろい」の必然性／偶然性

「父」千秋は准尉に呼び出されて召集解除となり、戦死を免れた。この「命びろい」なくして「僕」が誕生することはなかったわけだが、こ

の「命びろい」を「僕」は『猫を棄てる』で意図的に「偶然」として処理しようとしているように見受けられる。本稿「一」でも引用したように、「もし父が兵役解除されずフィリピン、あるいはビルマの戦線に送られていたら「中略」と考えていくととても不思議な気持ちになつてくる。もしそうならいけば、僕という人間はこの地上には存在しなかったわけなのだから。」（一〇七—一〇八頁）「この僕はひとりの平凡な人間の、ひとりの平凡な息子に過ぎないという事実だ。『中略』しかし腰を据えてその事実を掘り下げていけばいくほど、実はそれがひとつのたまたまの事実でしかなかったことがだんだん明確になつてくる。」（一一四頁）という記述は、「父」の兵役解除に必然性を見ようとしていない。

千秋は自身の召集解除について、「その理由はいまだにわからない」とする。むしろ、「京都帝国大学で学ぶ身であつたからではないことは言うまでもないのだが、実際のどのような理由で召集解除となつたのかは判然としない。しかし「軍隊とはそんなあまいものではない」以上、その召集解除は何かしらの事情があつてのこと、すなわち必然ではないかと考えられる。

第二次大戦中における召集解除の一例として、作曲家・古関裕而（一九〇九—一九八九）のケースを挙げる。一九四五年三月、海軍人事局から「特幹練の歌」の作曲を依頼されているさなかであつた古関のもとに召集令状が送られてきた。「徴兵検査は丙種だったから召集など考えたこともなかった」^①古関が海軍人事局へ確認したところ、事務処理上の手違いが発覚する。

「これは福島連隊区司令部で、本名の古関勇治を、古関裕而と気付かず発行したもののようです。しかし一度、出した召集令は取り消すことはできません。今「特幹練の歌」の作曲をお願いしている時ですから、作詞ができるまで二週間くらい、入団していらいっしやい。ちょうど体験のためにはいいチャンスで、いい作曲ができるでしょう。海軍の人事はすべてここの管轄ですから、間もなく召集解除します。」（古関裕而『人間の記録18 古関裕而「鐘よ鳴り響け」日本図書センター、一九九七年二月）

「間もなく」という約束ではあつたものの実際には約一ヶ月後、「重要要務者として召集解除する。」との通知を受け、軍隊生活は終了した。古関のケースでは、彼が重要要務者、つまり「特幹練の歌」の作曲という任務に当たっていたにも関わらず、事務処理上の手違いで召集してしまつたという理由により、一ヶ月ほどで召集解除となつたことがわかる。

古関の例の他、肺炎で入院するなど健康上の事由により召集解除される例も見受けられ、召集解除とは決して理由もなくなされるものではない^②はなかつた。

「理由はいまだにわからない」と千秋は述べたが、古関の例から類推すれば、一度目の召集が「学生の恩典であつた徴兵猶予願いを提出することを忘れていたために、学業なかばにして兵隊にとられた」ものだったため、そのつじつま合わせの意味で解除されたと考えることもできるのではないだろうか。

その上、ここで想起されるのは、「毎朝、長い時間じっと目を閉じ、心を込めてお経を唱えていた」（八十九頁）という「父」の習慣である。毎朝の読経に「父」を駆り立てた動機のひとつは、自身が召集解除され、結果的に生き残ってしまったという、戦死した仲間に対する survivor's guilt（生存者の罪悪感）だったのではないかと推察される。

この他にも、千秋が「命びろい」した理由＝必然性を様々に想定、推測することは十分に可能であるはずだ。春樹も、召集解除となる以上、そこには理由があったはずだということは承知のはずである。しかし少なくとも『猫を棄てる』語り手としての「僕」は、大学在籍期間との矛盾点を指摘するに留まり、「父」の召集解除や生き残りに理由＝必然性を付与しようとはしていない。

このように、「父」千秋の「命びろい」の物語は、それを第三者視点で読む我々にとっては必然と解釈したくなる誘因力を持つのだが、『猫を棄てる』では偶然のものとして扱っているのである。

以上を基にして、第三エピソード（兵隊としての父）と第四エピソード（木の上で消えた猫）の意味を考えてみよう。

まず、本稿「二」で論じたように、第一エピソード（父と棄てた猫）と第二エピソード（僧侶としての父）は相似形を成しており、棄てた猫は「父」の分身であった。そうすると、第三エピソードと第四エピソードも相似形を成していて、木の上で消えた猫もまた「父」の分身として描かれていたことが考えられるのではないだろうか。ただしそれは、現実世界の「父」の姿ではない。第四エピソードが、『スプートニクの恋人』同様、「こちら／あちら」というあり得たかもしれない別

様の現実に関わるものであることを踏まえれば、消えた猫とは、戦時中に徴兵され、そのまま召集解除されることなく戦死していたかもしれない、「父」——可能世界の「父」の姿ということになるろう。

もしもあの時「父」が召集解除されていなければ、自分はこの世に生まれていなかったかもしれない。しかし偶然により父は召集解除となり、死への枝を進むことなく、生の枝を進むこととなり命びろいした。第三エピソードと第四エピソードを通して「僕」が語るのは、そうした偶然が自己の生の根本に関与しているという意識である。

四 偶然生じた父子の絆

では、なぜ「僕」は自己のルーツを徹底して偶然性に見出そうとしているのであろうか。

『猫を棄てる』における偶然性を指摘した田中実の主張をまず見ておく。

このエピソード「引用者注—子猫が松の木から下りられなくなったエピソード」を紹介した後、続けて村上は、この『猫を棄てる』で「いちばん語りたかった」、「ただひとつのこと」とはと断って、「僕はひとりの平凡な人間の、ひとりの平凡な息子に過ぎないという事実」、「それがひとつのたまたまの事実でしかなかったことがだんだん明確になってくる。」と進めます。自分自身の存在の根拠を必然ではなく偶然に見出して総括するのです。⁽¹⁶⁾

この田中の指摘は頷けるものである。しかし「存在の根拠を必然ではなく偶然に見出し」た理由を田中は以下のように論じる。

村上春樹は久しく文章を書いてきた自分自身の主体の根拠を偶然性に見出し、その偶然性によって生じた主体、我ならぬ我として生成された我、主体それ自体を対象化し、これによって自身を捉え直すのです。「中略」父の毎朝の「おつとめ」と深く関わったこの戦争責任の問題を引き継ぐと言っても、その際どうしても事態は息子の目から見た解釈や思い込みとして現れてくるのです。そこでこれを真に「受け継いで」書くために、村上はまず書く自身の主体を徹頭徹尾相対化して「透明」化していきます。自己の主体の存在自体が大自然、大宇宙の中、奇跡のごとき偶然でしかないと捉えるがゆえに、一旦、自身は「名もなき」「一滴の雨水」に「置き換えられ」「消えて」透明と化す、ここに立つのです。¹⁷⁾

「戦争責任の問題」＝父の罪意識を「真に「受け継いで」書くために」、まず書く自身の主体を「透明」化する必要がある、その方法として「春樹」は「自身の主体の根拠を偶然性に見出し」たと田中は主張する。

しかし、「僕」が自らのアイデンティティを偶然性に見出した理由が、「父」の罪意識を継承するためであったとは考えにくいのではないだろうか。それは、本稿「三」で指摘したように、「父」の命びろいが客観的に解釈すれば必然とも捉えうる出来事であるにも関わらず、偶然

として処理しようとする「僕」の意識に大きく関わる。

『猫を棄てる』全体を捉えれば、次のようにこの理由を説明することができないのではないか。「僕」の意識の底には、「父」の期待を裏切り続けてきた罪悪感が長年巣くっていた。本作で、「父」の命びろいを必然と捉えず、偶然とすることで、そして自身の存在が偶然によるものと解釈することで——すなわち、「父」と「僕」の縁を偶然のものとして捉え直すことで、その罪悪感を薄めようとしたのだ、と。

「僕」は、自身が子供の頃から勉強に熱心ではなかったことを次のように語っていた。

それ「引用者注——「父」の学業成績が終始優秀であったこと」に比べると残念ながら（というべきだろう）、僕には学問というものに對する興味がもともとあまりなく、学校の成績は終始一貫してあまりぱっとしないものだった。「中略」そしてそのことは、父親を少なからず落胆させたようだった。自らの若い時代と比べて、「こんな平和な時代に生まれて、何にも邪魔されず、好きなだけ勉強できるというのに、どうしてもっと熱心に勉学に励まないのか」と、僕の勤勉とは言いがたい生活態度を見て、おそらく口惜しく思っていたことだろう。「中略」僕は今でも、この今に至っても、自分が父をずっと落胆させてきた、その期待を裏切ってきた、という気持ちを——あるいはその残滓のようなものを——抱き続けている。（七十一—七十二頁）

学業成績優秀だったものの学業半ばにして徴兵された自身に代わって、平和な時代に生まれた息子には勉学に励んでほしい——そのような「父」の「期待」、「その人生において果たすことのできなかったこと」を、一人息子である僕に託したいという思い」（一〇〇頁）は息子にとっては重圧でしかありえず、「僕と父親とのあいだの心理的な軋轢は次第に強く、明確なものにな」（二〇一頁）ったのも無理はないだろう。「僕」は「期待」に背き「父」を「落胆させた」。それを「僕」は裏切りと重々しく表現する。

そんな自身を振り返ればこそ、消えた猫の逸話が必要となったのではないか。偶然により現実が分岐していくという世界像に基づけば、「父」の命びろいから「僕」の誕生という出来事は、一本の幹のごとき宿命的な物語ではなくなる。無数にあり得た可能性の中から偶然選ばれたひとつの現実として父子の関係を捉え直すことになる。この捉え直しにより、「僕」が「父」の期待、「その人生において果たすことのできなかったこと」を「父」の代わりに背負って生きる必然性を薄れさせ、「期待を裏切ってきた、という気持ち」を緩和することにつながったのではないだろうか。

本作は偶然性を強調する仕掛けが戦略的に幾重にも張られた作品であった。先述の通り、第一エピソード（父と棄てた猫）は、因果関係を超越した偶然としか説明しようのない出来事が時として起こる人生の不可思議さを、虚構を交えつつ誇張したものであった。同様に第三エピソード（兵隊としての父）も、偶然に左右される人生の有り様を強調する逸話として構成されていた。

以上のように、「僕」は『猫を棄てる』において、自らのルーツ、アイデンティティの中核に偶然性を据え、「父」の期待に背き続けてきた罪悪感、延いては自己否定的な感情を和らげようとしたと考えられる。それは、長らく軋轢が生じていた父子の絆を偶然のものとして捉え直し、自身の中で改めて父と和解するための儀式であったとも言えるだろう。意識的にせよ、無意識的にせよ、「僕」が父子の必然的な絆という重荷を降ろそうとしているがゆえに、本作品では偶然が随所に表れていたのである。

五 裏切りと継承

幼少の頃、木の上で消えた猫のイメージは、「僕」春樹の心に強烈な印象を与え、深く記憶に刻まれた。猫が消えた松の木は、枝のように分岐していく現実世界に、また猫は、『スプートニクの恋人』や「人喰い猫」のすみれやイズミ、『猫を棄てる』での命びろいしなかったかもしれぬ「父」の姿に、それぞれ重なり合っている。

『スプートニクの恋人』「人喰い猫」以上に、『猫を棄てる』での枝分かれは不思議な偶然を強調している。つまり『猫を棄てる』の中核を成しているのは、自己存在の根拠が、偶然現れた「こちら側」の世界に過ぎない、という認識である。

一貫して偶然性が強調されることにより、「僕」は父子の必然的な絆、および父の期待に反し続けた罪悪感から解放される。つまり、今・ここにいるこの私（同時期に書かれた作品の題名を借りれば「一人称単

数」的な私)を肯定することが可能になる。

ただし、「僕」は「父」とのつながりを偶然的なものとして弱めるに留まらない。『猫を棄てる』は、「僕」が「父」の思いを、「父」が期待したのとは異なる次元で継承することを宣言した作品でもある。継承を明確に示した箇所として、次の二カ所が挙げられる。

まず、「僕」が幼い頃「父」に「自分の属していた部隊が、捕虜にした中国兵を処刑したことがある」と打ち明けられ、「父」が「処刑の様子を淡々と語った」という箇所である。

いずれにせよその父の回想は、軍刀で人の首がはねられる残忍な光景は、言うまでもなく幼い僕の心に強烈に焼きつけられることになった。ひとつの情景として、更に言うならひとつの疑似体験として。言い換えれば、父の心に長いあいだ重くのしかかってきたものを——現代の用語を借りればトラウマを——息子である僕が部分的に継承したということになるだろう。人の心の繋がりといいものはそういうものだし、また歴史というものもそういうものなのだ。その本質は〈引き継ぎ〉という行為、あるいは儀式の中にある。(六十二頁)

また、結末部にも「一滴の雨水」に託された「継承」の思いが綴られる。

言い換えれば我々は、広大な大地に向けて降る膨大な数の雨粒

の、名もなき一滴に過ぎない。固有ではあるけれど、交換可能な一滴だ。しかしその一滴の雨水には、一滴の雨水なりの思いがある。一滴の雨水の歴史があり、それを受け継いでいくという一滴の雨水の責務がある。我々はそれを忘れてはならないだろう。たとえそれがどこかにあつざりと吸い込まれ、個体としての輪郭を失い、集合的な何かに置き換えられて消えていくのだとしても。いや、むしろこう言うべきなのだろう。それが集合的な何かに置き換えられていくからこそ、と。(一一五頁)

この両箇所を合わせると次のように言うことができるのではないだろうか。

「僕」は、「父」の期待を背負う息子としてではなく、「交換可能な」名もなき一滴」として自己像を更新した。その上で、「父の心に長いあいだ重くのしかかってきたもの」を「受け継いでいくという一滴の雨水の責務」を宣言した。

これは、戦争のせいで学問に存分に打ち込めなかったという「父」個人の未練を継承するのではなく、「父の心に長いあいだ重くのしかかってきた」心の傷、戦争で亡くなった人々（それは捕虜のみならず、自分が召集を解除された部隊に残され戦死した兵士も当然含まれよう）に対する罪悪感や鎮魂の思いを継承するという宣言である。「父」の個人的未練から社会的責任へと、継承する思いのカテゴリーを広げたのではないだろうか。それが「名もなき一滴」となることの意味であると考えられよう。

これは「父」の期待に背を向け続けた罪悪感を解消し、自身の生き方を肯定するための新しい「父」との繋がり方と言えるのではないだろうか。

むずびと展望

本稿では、村上春樹が『猫を棄てる』で自らのルーツと父・村上千秋とを語る際、なぜ猫に言及する必要があったのかという問題意識を出発点に、「甲陽学院新聞」における千秋の回想録を参照しながら、春樹が作中人物「僕」として自らのルーツ及び父との関係をどのように捉えているのかを検証した。また、『スプートニクの恋人』及び「人喰い猫」との共通の世界像や消えた猫の持つ役割を明らかにした。我々の生きる現実世界は無数に分岐する現実の中のひとつに過ぎないのだという相対的・偶然的な世界像が三作品に共通していた。猫はいずれも「父」の分身としての役割を持ち、かついずれも人生における偶然性を強調するものであった。そうすることで、「父」との必然的な絆や「父」に対する罪悪感を和らげる一方、結末では新たな父との繋がりが見出された。ただし、ところどころに偶然性を強調する演出がほどこされていることから、『猫を棄てる』は、作者が父に対する罪悪感を和らげ、自身の生き方を肯定するため執筆したもので、客観的事実のみによるいわゆるエッセイとは一線を画す作品であるとまとめることができる。この意味で、本作を扱う際は、春樹と「僕」、千秋と「父」とを分けて考えることが有効だろう。

最後に、村上春樹作品における世界像について若干の展望を記しておこう。世界が偶然性に左右されていることは、本稿で取り上げた作品のみに見られる特徴ではない。ここではその一例として『騎士団長殺し』（新潮社、二〇一七年二月）に触れておきたい。本作は、画家・雨田具彦の家を借りた「私」が、具彦の遺した絵画「騎士団長殺し」を発見し、不可思議な世界へ引き込まれる物語である。序盤に提示されるのは、因果関係の不確かさや偶然性に基づく世界像である。

あとになって振り返ってみると、我々の人生はずいぶん不可思議なものに思える。それは信じがたいほど突飛な偶然と、予測不能な屈曲した展開に満ちている。〔中略〕

しかし総じて言えば、理屈に合っているにせよ合っていないにせよ、最終的に何かしらの意味を発揮するのは、おおかたの場合おそらく結果だけだろう。結果は誰が見ても明らかにそこに実在し、影響力を行使している。しかしその結果をもたらした原因を特定するのは簡単なことではない。（第1部 顕れるアイデア編「4 遠くから見ればおおかたのものは美しく見える」）

また、具彦の弟・継彦が学生でありながら書類の不備で徴兵され、南京戦に従軍し、「戦争体験のトラウマから、若くして自らの命を絶つ」⁽¹⁸⁾ といった挿話には、明らかに『猫を棄てる』との関連性が窺える。『猫を棄てる』初出の二年前の作品であるが、継彦は村上千秋の影を濃厚に帯びている。さらに、絵画「騎士団長殺し」が、継彦の自死がひと

つのきつかけとなつて具彦が描いた作品であることが判明した際、「私」は、「ひよつとしてあの絵は、私が雨田具彦から引き継いだものなのだろうか？」と自問する。「私」は偶然にして巡り会った絵画を、延いてはそこに染み込んだ心の傷を引き継ぐ立場にあることを自覚するのである。こうした点においても、『騎士団長殺し』と『猫を棄てる』との間にはテーマの共通性が窺える。

さらに、「あちら側」の世界に通じる回路の研究も必要であろう。回路には、従来重視されてきた井戸（地下）のほかに、今回取り上げた木の枝を代表とする高所（地上）という対比的な系統もあった。あり得たかもしれない別様の世界を想起させる重要なモチーフとして表れた木の枝（地上）の暗喩は、本稿で取り上げた作品のほか、『ねじまき鳥クロニクル』第3部5（新潮社、一九九五年八月）でも描かれている。『スプートニクの恋人』で「僕」やミュウがそれぞれ山の上や観覧車の頂点で「あちら側」へ引き込まれる擬似経験をしたことを踏まえ⁽²⁰⁾ると、木の枝に限定せず高所に「あちら側」の世界に通じる回路があると考えられる。そうした回路は、『1Q84』（新潮社、二〇〇九年五月「BOOK1・BOOK2」、二〇一〇年四月「BOOK3」）や『クリムム』（『文藝界』二〇一八年七月号）などが該当するだろう。登場人物が高所で身動きが取れない（閉じ込められる、パニックに陥る等）状態に陥った末、異界への「出口」が出現するというパターンが共通して見られ、高所という異界への回路は軽視できない。井戸と高所という回路の違いは、村上文学の世界像を解明する上で重要である。今後の研究を期したい。

「付記」

本文の引用は全て文庫版に依った。ただし「人喰い猫」本文の引用は『村上春樹全作品1979～1989』8に依った。引用に際してはルビ、傍点を省略した。村上千秋関連資料の調査にあたっては、京都大学文学部、および筆者の勤務校である甲陽学院中学校・高等学校今西昭先生に全面的にご協力いただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 例として、二〇一九年五月十日付の朝日新聞、読売新聞の朝刊などは「エッセー」として紹介している。
- (2) 甲陽学院中学校・高等学校第十一代校長・今西昭氏による。今西氏は同校卒業生であり、村上千秋の教え子にあたる。
- (3) 二〇一九年五月十日付の朝日新聞、神戸新聞、日経新聞、産経新聞の朝刊記事はその例に当たる。
- (4) 佐藤優「父と子・猫を棄てる物語と放蕩息子の子とえ——村上春樹『猫を棄てる』 父親について語るとき」を『文藝界』第七十四巻第五号、二〇二〇年五月
- (5) 田中実「無意識に眠る罪悪感を原点にした三つの物語——〈第三項〉論で読む村上春樹の『猫を棄てる』 父親について語るとき」と『二人称単数』あまきみこの童話『あるひあるとき』——都留文科大学大学院紀要第二十五集、二〇二一年三月
- (6) 鴻巣友季子「村上春樹『猫を棄てる』をめぐる」『文藝界』第七十三巻第七号、二〇一九年七月
- (7) 注6に同じ。

- (8) 杉山裕紀「村上春樹『スプートニクの恋人』論——こちら／あちらの問題を軸として——」『歴史文化社会論講座紀要』第十四号、二〇一七年二月
- (9) 注5に同じ。
- (10) 平野芳信「デレク・ハートフィールド考——A Wild Heartfield Chase (当てのない追究)」『京都語文』第二十七号、二〇一九年十一月
- (11) 注4に同じ
- (12) 時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」(<https://kgis.net/kjmapw/index.html> 二〇二四年八月八日参照)で、西宮浜が建設された一九七一年まで(一九四七～一九五〇年及び一九六七～一九七〇年)の香櫛園浜周辺地図を確認することができる。
- (13) 助川幸逸郎『謎の村上春樹』(プレジデント社、二〇一三年十月)第一章で、この回想録の一部分が紹介されている。これを知った春樹が回想録を入手した可能性も否定できない。
- (14) 古関裕而『人間の記録18 古関裕而「鐘よ鳴り響け」』(日本図書センター、一九九七年二月)
- (15) 佐々木隆治郎「三回の召集に生き残り 八十七歳でも青年」(帰還者たちの記憶ミュージアム 軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦(兵士編)第12巻 第2部 聞き取り調査記録 (<https://www.heiwakinen.go.jp/>) 二〇二四年八月四日参照)
- (16) 注5に同じ。ただし引用の際、田中による傍点省略。
- (17) 注5に同じ。ただし引用の際、田中による傍点省略。
- (18) 第2部 遷ろうメタファー編「51 今が時だ」
- (19) 第2部 遷ろうメタファー編「48 スペイン人たちはアイルランドの沖合を航海する方法を知らず」
- (20) 注8に同じ。